



Vol.67

机の上の小さな変革



無意識の接点

こんにちは、菅俊一です。今回は、モノと身体の物理的な接点について考えてみたいと思います。

早速ですが、普段使っているペンを手に取って何か書いてみましょう。そのときに、どうやって手指でペンを持っているかを確認するために、ペンと手指が接している部分を、小さい丸シールや付箋などでマーキングしてみてください。接点が詳しくわかるように、できるだけ細かく貼ってみるとよいでしょう。

マーキングを終えたら、今度は普段使っているマグカップやコップでも同様に試してみてください。こちらも手指が触れているところに、シールや付箋などを細かく貼っていきます。

もしも途中で持ち替えているといったようなことがあれば、持ち替えた場所も含めて、触っているところをすべて記録してみてください。

最後に、みなさんが普段座っている椅子についても、同じように手指で触っている部分にシールや付箋を貼り付けてみましょう。立った状態から椅子に座るまでのプロセスを通じてやってみてください。

こちらも椅子を触って引き出しているところや、座りながら触っている箇所などがあれば、すべて記録するようにしましょう。

いかがですか？ ペン、カップ、椅子にそれぞれ記録された接点をよく見てみると、無意識のうちにかなり巧みに手指を使って物の大きさや形、重量、そして周辺の

環境に適応しながら、モノとの接点を変化させていることがわかんと思います。

身体と物体の関わり方を再発見する

たとえば、ペンは指先で持っているイメージがありますが、実際には親指と人差し指の股で支えていることが重要であったり、ノック式のペンであれば、ノックをする指以外の部分で、しっかりとペンを固定する必要があると気づくことができます。

カップの場合を見てみると、中に入る飲み物の温度や入っている量の影響によって、持つ部分が定まってしまうことがあるなど、物の形と手の関係だけでなく、中身のコンディションも重要であることがわかります。

椅子の場合は、椅子の重量やキャスターの有無によって机から引き出す際の持ち方が変化したり、座るときも座面の高さや服装、荷物などを含めた身体の状態により、触れる部分が変わっていることがわかんと思います。

普段、当たり前のように繰り返している動作も、このように細かく視点を定めて見てみることで、思いもよらない触り方をしていることに気づくことができるのです。

すると、これまで自覚していなかった癖やモノの扱い方、身体の動かし方など、自分と周囲のモノに関する意外な発見が生まれるかもしれません。



PROFILE 菅 俊一 (SYUNICHI SUGE)

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科准教授。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、さまざまなメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンテコノミクス』など。